通巻144号

山と

©わたせせいぞう／APPLE FARM INC.

ご挨拶

宮司　**宮西修治**

令和五年五月八日を以て、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の区分が「5類」となり、足掛け四年に亘る「コロナ禍」が収束しました。この間、当社でも多くの祭典が中止や延期に追い込まれました。神事は神職のみで斎行するという、祭とは名ばかりの閑散とした境内に、寂しさをかみしめつつ諸神事を行ってきました。しかし、去る令和五年六月の山王祭は、久しぶりに本来の形で斎行することができました。「コロナ禍」以前は境内神輿庫前で行われていた「山王音頭と民踊大会」も、昨年は隣接する山王パークタワーの公開空地にて行い大変な賑わいとなりました。神幸祭のない「陰祭」とはいえ、従来の、活気に溢れた山王祭を再現するに至ったことは喜ばしい限りでした。

一方で、全国的に、祭に関わる事故が多発しているとも聞きます。四年に亘る「コロナ禍」で、祭の護持と継承が満足に行われず、曳手の経験不足から山車が転倒して死傷者が出た、という痛ましいニュースも耳にしました。ネットやSNSの普及により、映像媒体での記録が主流の現代ではありますが、祭の継承は未だ人々の経験と口伝えに頼る部分が大きいと存じます。長らく祭りが行われなかったことで、その機会が失われてしまったのでしょうが、改めて、「常(つね)の例(ためし)の随(まにま)」に祭を行い得ることの有難さ、尊さを実感するばかりです。

さて、本年は六年ぶり、且つ令和初の神幸祭斎行の年でもあります。本年初のお披露目となる「象山車」を始め「諫鼓鳥」や「御幣を担ぐ猿」など、様々な山車が行列を彩り、大神様の御神徳を氏子各町に広めんと、神社職員氏子崇敬者一同、胸を張って練り歩きます。行列は総勢五百余名を数え、凡そ三百メートルの列を成して二十三キロの道のりを歩きます。朝は午前七時四十五分に発輦、夕方五時に還御するという、まさに一日がかりの一大祭礼となります。現在、コロナウイルスが消滅したわけでもなく、特効薬も開発されていない現状を『コロナ禍は続いている』とする意見も散見しますが、人々が力を合わせ、この江戸第一の祭を行うことで「ポストコロナ」時代の幕開け、日本再発進の口火を切ることができれば、と考えています。江戸の町に「山王祭」あり日の本に「天下祭」ありと、後世まで語り継がれる、堂々たる祭を斎行して参る所存です。

令和六年 山王祭 行事日程

六月

七　日(金)六時　**末社八坂神社例祭**
　同　七時四十五分　**神幸祭**
八　日(土)十時　**境内茶園並狭山新茶奉納奉告祭**
九　日(日)十二時・十四時半　**稚児行列**
十　日(月)十一時　**表千家家元献茶式**
十三日(木)十八時　**献灯祭**
十四日(金)十八時　**献灯祭**
十五日(土)十一時　**例祭**
　同　十八時　**献灯祭**
十六日(日)十一時　**煎茶礼道日泉流献茶式**
　同　十三時　**山王嘉祥祭**
十七日(月)十時　**裏千家家元献茶式**

八　日(土)十六時頃　**上町連合宮入**
九　日(日)十時半　**日比谷高等学校箏曲部奉納演奏**
　九時十分　**下町連合摂社宮出し**
　十二時頃　**下町連合渡御**
十二日(水)十二時十五分　**ミニコンサート「にっぽんの歌」**
十三日(木)十八時半　**山王音頭と民踊大会**
　～
十五日(土)

特別寄稿

参議院議員
山谷えり子

木々の緑も深みをまして、風薫る季節となりました。

眩しい木漏れ日に手をかざして、胸いっぱいに深呼吸しながら過ごす時間を楽しんでいます。

本年は元旦に能登半島地震、翌二日には羽田空港での航空機衝突事故という痛ましい惨事が続きました。四ヶ月経った今なお多くの方々が厳しい生活を余儀なくされています。被災された皆様が一日も早く住み慣れた土地に戻れるよう、そして安心で安全な生活を取り戻せるよう党内でも様々な部会で対策がすすめられてまいりました。

生活の再建、生業の再建、災害復旧を迅速に効率よく進めるために、被災された当事者のご意見を伺う機会もあり、ご自身も困難な中にあって地域や業界の復旧復興のために御協力いただいていることに心より感謝しております。

特に、私は文化立国調査会長を務めていたことから石川県立輪島漆芸技術研修所所長で人間国宝の漆芸作家・小森邦衞氏をお招きし国会議員連盟「漆＝ｊａｐａｎ研究会」の仲間とともに、わが国を代表する伝統工芸である輪島塗の危機的状況を報告いただき、甚大な被害が出た研修所での研修活動再開への取組み、輪島塗の未来を担う若手技術者の育成に向けた方策について議論しました。

重要無形文化財でもある輪島塗は、独自の分業システムで木地、塗り、加飾などの段階を通じて１２０ほどの細かい工程があり、一個に数人の専門の職人が携わる分業で器を完成させています。

今回の震災により、職人をまとめ製造から販売を担う１０３軒の塗師屋のうち、13社が本拠を失い、８００人ほどの職人も多くが市外に二次避難されており廃業を決める職人もでてきているそうです。

調査会では、閣僚等が外国訪問する際に相手国への贈答品として輪島塗を利用促進していくよう要請していこうとの意見もあり、四月下旬に米国で開催された日米首脳会談では、早速、岸田首相からバイデン大統領への輪島塗のコーヒーカップとボールペンが手渡されました。

円安の追い風も影響しインバウンド需要が一気に加速して、日本に溢れている様々な伝統文化や高度な技術が世界に〝広まる〟ことは嬉しいことですが、百年後に〝流出による消滅〟とならないように保護や育成についても迅速な対応が求められます。

サウジアラビアには、東京ドーム十個分の広さもある漫画作品「ドラゴンボール」のテーマパークの建設が決定しました。日本のコンテンツが世界に求められていることを歓迎する一方で、国内でもっと発信すべきであったのではないかとの声も聞かれます。

文化以外にも、スポーツ選手や音楽などのアーティストの活躍により『日本・ＪＡＰＡＮ』の評価も高まっており、もはやフィールドは世界であることを実感しています。

教育現場にも、それらの変化が感じられます。

今春、中学二年になった孫の英語の教科書（三省堂）には、海外から訪日された人に日本の文化、着物、書道、武道や落語を紹介する内容があり、日本を知ると同時に国際人として心を広げる内容となっていて感慨深く読みました。

平成十八年の教育基本法改正により、教育の目標の一つとして「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と記されたことが、長い年月を経てやっと令和の時代に反映されていることに胸が熱くなりました。

最近は時間軸が短くなっている傾向があり、何に対してもすぐに結果を求めてしまいがちですが、成果を出すためには日々の地味な努力の積み重ねが大切で、それらがある日突然ぱっと花が咲くのだと思います。

新しい年度を迎え、今までと異なった環境で仕事や学業に励んでいる方も多いと思いますが、失敗も将来の人生の大きな糧となるので安心して一歩を踏み出す勇気をもってほしいと思います。

人づくり、ものづくりの日本が世界から憧れられ、さらなる成熟国家の宝を輝かせていけるよう私もひたすら働いてまいります。

山王祭 ―日本三大祭― 裏閻

川越祭礼研究家
水戸一斎
（監修　山瀬一男）

鳶

山王御祭礼の神輿の前を、半纏姿の軽快な出で立ちをした人が歩いています（**画像1**）。鳶と呼ばれるこの人々は違和感なく行列に溶け込んでいるように見えますが、いったいどのような人なのかご存知でしょうか。

「『鳶』というからには、鳥のように高いところで作業をする人でしょう？」

「むしろ建物の基礎工事をする人では？」

「たしか出初式のときにはしごに乗ってましたよね？」

「門松などを作っていた気がします」

「同じ格好をした人がテレビで歌っていました」

これらはすべて正解です。そしてそれ以上のことを江戸時代の鳶の人たちはしていたのです。今回はこの鳶職についてご紹介します。

鳶の源流

古来、巨岩や巨木は神が降臨する依代として神聖視されていました。その御神木を社殿の御用材にするため山から切り出し、神社まで運搬するさまは万葉集にも歌われ、今でも伊勢神宮の式年遷宮に見ることができます。御神木を曳きながら、人々は「木遣り」という御祝儀歌を唄います。これを「お木曳き」と言います。

戦国時代になると、大がかりな城郭の築造が行われました。大勢の人足が駆り出され、巨石や大木が運び込まれました（**画像2**）。安土城では、一つの石を山の上へ持ち上げるのに一万人もの人足が三日三晩動員されたと言います。運搬作業自体が神聖な行為とみなされましたので、石は豪華な布で覆われ、音頭取りに合わせて笛や太鼓が人足をはやしたてました。

続く江戸時代、江戸の町を日本の中心に改造する大規模な工事が実施されました。江戸城や藩邸の造営、道路や運河といった交通網の整備、流入する町人の住宅建築など、開幕から十七世紀半ばにかけて猛烈な勢いで都市が形成されていきました。

これらの場面で活躍した人足たちが鳶の源流となります。鳶口という、木の棒の先に鉄の鉤をつけた道具を使って大木を地面の上にすべらせ、梃子の原理を利用して重い石を動かしました。「鳶口の者」「梃子の者」と呼ばれた彼らは、「お木曳き」のときと同様木遣りを唄いながら作業をしました。

木や石を運ぶだけでなく、建設現場では地盤を突き固め、足場を設置し、建物を組み上げました。つまり重量物運搬や高所作業といった、体力を要し危険を伴う仕事が彼らの職務だったのです。腕っぷしが強く身軽な彼らは現場の花形でした。

ところが江戸の町の開発が一段落すると、彼らの仕事はめっきり減ってしまいました。収入も激減し、生活は著しく不安定になりました。力をもてあました彼らは、けんかや口論に明け暮れるようになりました。仕事柄はっきり物を言う性格も災いし、人足たちは「暴れ者」「わがまま」という烙印を押されてしまいました。

寛文五年（一六六五）、横行する暴力による社会不安を解消するため、日用座という日雇い人足の組織が創設されました。「鳶口の者」と「梃子の者」は強制的に日用座に加入させられ、両者まとめて「鳶」と呼ばれるようになりました。彼らは労働

【画像1】

【画像２】石曳図屏風（画像提供：兵庫県立歴史博物館）

力以外に特別な技能を持たないとみなされ、「職人」の一員とは認めてもらえず、登録料を払って鑑札を受け取らなければ仕事ができない身分となってしまいました。鑑札を持っていたとしても、おとなしくしていなければ日用座から仕事を回してもらえなかったのです。

火消しの鳶

十八世紀に入ると、頻発する火災が大きな社会問題となりました。江戸は住宅が密集しているうえに耐火建築物がほとんどなく、十分な消防設備も持たないため、五年に一度は火事に見舞われるというほど災害に対し無防備な都市と化していました。

享保二年（一七一七）、小石川の馬場から出火した火事は築地まで焼き尽くし、百余名の命を奪いました。その翌月に南町奉行に就任した大岡越前守は、被害拡大の原因が消火体制の不備にあることをたちどころに見抜き、町人たちに火消しの組織を作るよう命じました。それまでは武家地にしか専門的な消防組織がなかったからです。

幕府からの命令とはいえ、町にとって火消し専門の集団を常時確保しておくことはかなりの負担でした。そのため町火消ができた当初は主に商家の使用人を火消し役に任命していました。ところが使用人は消火に関する知識がなく、火事の現場ではあまり役に立ちません。死と隣り合わせの過酷な現場ですから、火が迫ってくると逃げ出してしまうありさまでした。

こうしたことから、町人たちはだんだん鳶に火消しを任せるようになりました。彼らは建物の構造に詳しく、どうすれば火を消せるかを心得ていたからです。町の人々は鳶の頭（かしら）を「町抱え」にし、平時は道路の補修やどぶさらいなどをさせて、出費が無駄にならないよう工夫しました。そうして有事の際に消火に携わってもらうことにしたのです。

【画像３】町火消火事場に赴くの図（出典：風俗画報第 179 号）

その結果、予想もしていなかったことが起こりました。町と鳶の関係が徐々に変わってきたのです。鳶はしきたりに明るいので、町の人たちは四季折々の行事や冠婚葬祭の準備を鳶頭に頼むようになりました。縄を扱うのもお手のものでしたので、門松や注連縄（しめなわ）などを作るのも上手でした。今でも鳶といえば正月飾りを連想するのはそのためです。ほかにもけんかの仲裁や、ならず者を追い払うことなども、鳶頭のところへお願いに行くようになりました。鳶は町にとってなくてはならない存在となり、町のみんなから頼りにされるようになりました。

そしていざ火事になると、鳶はその本領を如何なく発揮しました。半鐘の音が聞こえると、鳶頭は仲間の「駆け付け鳶」を集め、木遣りを唄いながら火事場へ急行しました（**画像３**）。現場へ到着するや、火消組の旗印である纏（まとい）を屋根に据え付け、ほかの鳶はそれを目印に周囲の家屋の雨戸をふさいで新鮮な空気を遮断しました。そしてはしごを使って我先に屋根に上り、鳶口で屋根板を一枚一枚はがし、熱気を上へ逃がしま

【画像４】歌川広重「江戸の華」（出典：国立国会図書館デジタルコレクション）

した（**画像４**）。それからはしごを降り、風下にある家屋を引き倒して延焼を極力抑えました。理学博士の中村清二氏は「防火と科学」という論文のなかで、「如何（いか）にも今日の科学から見て、合理的の方法であることに驚いた」と述べています（『大日本消防』創刊号）。

これら一連のことを、屋根上の足元が悪い場所で、千度を超える炎が刻々と押し寄せる中を、瞬時に状況を判断しながら行ったのです。首尾よく鎮火をし終えると、彼らは来たときと同じように木遣りを唄いながら悠々と引き揚げていきました。勇猛果敢・迅速・冷静沈着・一致協力が鳶の美徳でした。義理人情にも厚く、いきなしぐさの彼らが、人々のあこがれの的になるのは当然のことでした。

幕府は当初、荒くれ者の鳶を火消人足とすることを固く禁じていました。ところがその後の町場における鳶の活躍を見るにつれ、彼らの非凡な能力を認めざるを得なくなりました。

天明七年（一七八七）、幕府は火消組の定員の半分まで鳶とすることを許可しました。残りの半分は商家の使用人でしたので、実質的に火消し全体を鳶が仕切ることになったようなものした。

寛政九年（一七九七）には鳶頭が火消組の頭取に取り立てられ、火消しを統率するよう命じられました。それと前後して日用座が解体されたので、町火消は名実ともに鳶による自律的な組織となりました。

まつりの鳶

『茉莉花（まつりのはな）』という江戸時代の書物によると、早くも正徳四年（一七一四）には「手子鳶口之者」が祭礼に登場しています。「手子」は「梃子」の当て字なので、「手子鳶口之者」は鳶のことを指します。鳶が何をしたかまでは記されていませんが、おそらく屋台を操作するために雇われたものと思われます。屋台というのは「屋根付き移動舞台」のことで、町の人は車輪が付いたこの舞台を祭礼の出し物として曳き出し、芸能を披露しました。正徳四年の祭礼では、能の「泰平猩々（しょうじょう）」を演じたようです。ただでさえ重い屋台に何人もの人が乗り込みましたので、曲がり角を曲がるのは大変でした。鳶の人数も、最初に雇った十人では足りず、途中から二十人に増員されています。

江戸時代から昭和に至るまで、屋台は鳶が動かすものと相場が決まっていました。鳶のように力が強く結束が固い集団はほかになかったからです。屋台だけでなく、張りぼてで作った引き物や、年々巨大化する山車（だし。当時は「出し」と書きました）も鳶が受け持ちました（**画像５**）。御祭礼初期の「出し」は四人で担ぐ簡易なものでしたが、そのうち大きくなって牛に曳かせるようになり、さらに牛でも動かせないほど大型化したので、鳶が後ろから押すようになったのです。

鳶たちは屋台や山車を取り囲み、まっすぐな道では木遣りを唄いながら歩き、曲がり角に差しかかると力を合わせて向きを変えました。

十九世紀初頭には、木遣りを唄うためだけに行列に参加する鳶も現われました。それはさながら巨石の前の音頭取りのように、鳶（手子）の前で仲間を鼓舞したのでした。彼らは「手子前」あるいはそれをもじって「手古舞」と呼ばれました。

文化二年（一八〇五）の祭礼の際、幕府から「近年火消人足どもが手子前と称し、出しへ付き添い祭礼にまかり出ているが、そういうことは一切ないよう人足どもへ事前に申し渡しておくこと」と釘を刺されています。もっとも、手子前はその後も続けられたようで、明治三十八年に書かれた菊池貴一郎の『絵本江戸風俗往来』にも、「手古舞とて、祭礼の印半纏に打ち揃う鳶の者、多くは百人に近く、少なきは二十人に下らず」と描写されています。揃いの半纏は鳶仲間の団結の証（あかし）でした。それにしても、百人近くの手子前が参加していたとは驚きです。

御祭礼で鳶が担った役割はほかにもあります。以前ご紹介したとおり、

【画像 5】歌川国芳「山王祭之図」（出典：国立国会図書館デジタルコレクション）

御祭礼の獅子は大伝馬町と南伝馬町の鳶が十二人ずつ参加し、その役を務めていました。彼らも揃いの半纏を身にまとい、その中の二人が獅子頭を肩に乗せ、ほかの鳶連中とともに木遣りを唄って歩きました。

行列が通る道を祭礼前に掃き清めるのも鳶の役目でした。道路に穴が開いていれば補修をし、祭礼当日の悪天候に備えて砂やほうきを用意しました。これは「馳走」という、貴人をもてなすための儀礼です。砂は道端に置いておくだけでなく、きれいな円錐形に整えました。これを「盛砂」と呼び、京都の上賀茂神社に見られる「立砂」が起源と考えられています。

盛砂に代表されるように、鳶は文化継承の担い手となっていました。鳶がいたおかげで現代まで残っているしきたりは数多くあります。彼らがまつりを「文化」にまで高めたと言っても過言ではありません。

江戸城の火事

天保十五年（一八四四）五月十日未明、激しい雨の降る中、江戸城本丸の大奥から出火しました。発見したときにはすでに火が燃え広がっていましたので、町奉行はためらうことなく町火消に救援を依頼しました。町奉行は直属の火消連中より、町火消の方を信頼していたのです。

折しも火は三層の櫓に襲いかかっていました。鳶たちは石垣をよじ登り、はしごを継いで屋根に上がりました。雨のため滑りやすく、踏みはずせば命のない場所でしたが、手渡しで手桶の水を受け取り、懸命に消火しました。おかげで屋根の一部を焼損しただけで済みました。

汐見櫓を消し止めた別の火消組は、急いで書院門へ向かいました。そこは一面火の海となっていて、門はすでに焼け落ち、一旦消した火も再び燃え上がる始末でしたが、鳶たちは一か所に狙いを定めて消火に当たり、本丸入口の要である冠木門を守り通しました。

裏門へ回った組は火に追われながらもその場に踏みとどまり、互いに励まし合って奮闘しましたが、突然門が焼け崩れて彼らを飲み込み、多くの者が怪我をし、命を落とす者もいました。

それでも鳶たちは何とか火を抑え込みました。服は焦げ、顔や手は火傷を負い、疲れのためぬかるみに足を取られて泥だらけでした。迎えに来た家族はうれし涙を流し、そのすそにすがりました。家族をいたわりながら家路につく彼らは、まぎれもなく「名もなき英雄」でした。

令和六甲辰年六月七日（金）
日枝神社神幸祭御順路

（➡⬆進行方向を示す）

時刻は事情により前後することがあります。

日枝神社
御発輦 7:45
御還御 17:00～17:15

靖國神社

麹町一丁目交叉点 8:20～8:35
四谷駅前 8:45～9:00
四谷一丁目 9:00～9:15
隼町交叉点 8:05～8:20
主婦会館前
御着輦 9:15～9:30
御発輦 9:30～9:45
麹町四丁目 9:50～10:05
靖國神社南門 10:30～10:45

国会議事堂

首相官邸前 16:45～17:00

皇居（二重橋）

麹町警察署前 10:55～11:10

国立劇場（元山王）
御着輦 11:05～11:20
御発輦 11:25～11:40

警視庁前 11:45～12:00
祝田橋交叉点 11:50～12:05
外苑坂下門口 12:00～12:15

皇居坂下門
御着輦 12:05～12:20 駐輦祭
御発輦 12:30～12:45 参賀・神符献上

丸ビル角 12:40～12:55
丸の内二丁目 12:50～13:05
鍛冶橋交叉点 13:00～13:15
すずらん通り入口 13:20～13:35

日本橋日枝神社（摂社）
御着輦 13:45～14:00
御発輦 14:45～15:00

日本橋交叉点 15:00～15:15

東京駅

京橋三丁目 15:15～15:30
銀座一丁目 15:20～15:35
銀座四丁目 15:30～15:45
新橋一丁目
御着輦 15:45～16:00
御発輦 16:05～16:20
コリドー通り 16:10～16:25
東京宝塚劇場前 16:15～16:30
帝国ホテル角 16:20～16:35
内幸町交叉点 16:25～16:40

皇居
皇居東御苑
皇居外苑
日比谷公園
東京
新橋
有楽町
日比谷通り
丸の内仲通り
外堀通り
日山祝田通り
内堀通り
大手町
丸の内
霞が関
永田町
平河町
麹町
一番町
三番町
四番町
六番町
八重洲
京橋
日本橋
八丁堀
茅場町
兜町
新大橋通
鍛冶橋通り
永代通り
平成通り
さくら通り
中央通り
昭和通り
晴海通り
靖国通り
外苑東通り
青山通り
桜田通り
市ケ谷
四谷
ホテルニューオータニ
エクセル東急ホテル
帝国ホテル
日比谷シャンテ
国会図書館
憲政記念館
最高裁判所
首相官邸
東京公園
清水谷公園
紀尾井町
坂本町公園

航空法に基づき、原則無人飛行機（ドローン等）の飛行は禁止です。

奉祝山王祭

順不同敬称略

(株)ぬ利彦
代表取締役社長
中澤彦七
3口

八重洲ゴルフライフ
八重洲ライフ(株)
代表取締役社長
松本信義
3口

マネックスグループ
会長
松本大
3口

永田町・霞ヶ関
平河町

山王勲供給(株)
代表取締役社長
津曲荒太
2口

山の茶屋
遠藤恒夫

ザ・キャピトルホテル 東急
総支配人
志村恒治

日枝神社四葉会

(株)アルファビデオ
代表取締役
青山朋孝

山王むらさき会
会長
藤田誠

(株)永田町 天竹

麹町・紀尾井町

(株)泉屋東京店
代表取締役
泉由紀子
2口

(株)ニュー・オータニ
代表取締役社長
大谷和彦

(株)ジャパングレーライン
代表取締役
眞下慶一郎

(株)ジョー・コーポレーション
代表取締役
堀切健司

弁護士法人 一番町綜合法律事務所
代表弁護士
神﨑浩昭

(有)ナリタ美容室
代表取締役
成田弘子

番町・九段・四谷

(株)伊勢半本店
代表取締役社長
澤田晴子

三番町
田中康博

(資)清水隆商店
代表社員
清水昭治

表千家 不審菴
家元
千宗左

(株)千修
代表取締役社長
下谷友康

大手町・丸の内
内幸町・有楽町

東宝(株)
代表取締役社長
松岡宏泰

(株)帝国ホテル
代表取締役社長
定保英弥

泉吉(株)
代表取締役
岸本昌子

(株)東京會舘
取締役社長
渡辺訓章

(株)キョウエイアドインターナショナル
代表取締役社長
廣瀬勝巳

東京技工(株)
代表取締役社長
林光男

八重洲・日本橋

日本橋ゆかり
野永喜一郎

(株)榮太樓總本鋪
代表取締役社長
細田将己

(株)高島屋日本橋店
上席執行役員 店長
佐藤尚弘

東京建物(株)
代表取締役社長執行役員
野村均

日本橋吉野鮨本店
吉野正敏

川崎定徳(株)
代表取締役
川崎眞次郎

木村實業(株)
代表取締役
木村平右衛門

中西瀝青ホールディングス(株)
代表取締役
森口友美子

金子架設工業(株)
代表取締役
青木茂

小宮山印刷(株)
代表取締役社長
小宮山貴史

京橋

(株)大澤ローヤル
代表取締役
大澤忠政

(株)トミタ
会長
冨田正一

清水建設(株)
取締役社長
井上和幸

中島金属箔粉工業(株)
代表取締役社長
中島裕

東京中央青果(株)
代表取締役社長
鈴木敏行

TANAKAホールディングス(株)
代表取締役社長執行役員
田中浩一朗

いちよし証券(株)
執行役社長
玉田弘文

(資)北見商店
北見まさる

八丁堀
茅場町・兜町

北見不動産(有)
代表取締役会長
北見芳夫
代表取締役社長
北見千穂

奉祝山王祭

順不同敬称略

新銀座

(株)小松ストアー 代表取締役 小坂 敬
(株)木村商店 代表取締役 木村暖子
(株)ギンザのサエグサ 代表取締役社長 三枝 亮
(株)小林傳次郎中央地所部 代表取締役社長 小林久子
(株)銀座ナイン 代表取締役会長 柴田孝則
正金商事(株) 代表取締役 蛯原宗久
銀座越後屋 八代目 永井甚右衛門
銀座吉田(株) 代表取締役 吉田民雄
(株)銀座木村家 代表取締役 木村美貴子
富士産業(株) 代表取締役 中村仁彦

崇敬者（氏子外）

(株)ホッタ 取締役社長 堀田峰明
コトー商事(株) 代表取締役 野玉善一
きねや足袋(株) 代表取締役 中澤貴之
(株)錦屋マリエマリエ 取締役社長 勝田久美子
(株)フェム 代表取締役 藤田誠
(株)ミロク情報サービス 代表取締役社長 是枝周樹
鈴木徽章工芸(株) 取締役社長 鈴木敬二
(株)アーバネットコーポレーション 代表取締役会長 服部信治
(株)糟谷 相談役 糟谷孝男
(株)井筒装束店 代表取締役 佐織鉄郎
(株)髙田装束店 代表取締役 加藤充則
(株)大槻装束店 代表取締役 大槻奈津子

佐竹昭二
(株)なだ万 代表取締役社長 大貫一敏
裏千家 今日庵 千玄室 宗室
(株)フォーシーズ 代表取締役会長兼CEO 淺野秀則
安全自動車(株) 代表取締役 中谷宗平
(株)丸井スズキ 代表取締役 鈴木貴博
廣田特許事務所 廣田雅紀
有楽商事(株) 代表取締役 平沼顕司
佐藤産業(株) 会長 佐藤太美雄
(株)信英堂 代表取締役 桜井俊一
(株)木村屋總本店 代表取締役社長 木村光伯
朝日総業(株) 代表取締役 池本なぎさ
(株)CMC 代表取締役 髙橋悦郎

酒は、これを神々に献り、その撒下（おさがり）をいただく事によって、うつうつとした気持ちが晴れやかになる百薬の長です。
当日枝神社の御祭神大山咋神は、古来、酒を司らせ給う東都の酒神と厚く信仰せられるところであります。

令和六年正月献酒醸造元芳名（順不同・敬称略）

(株)丸山酒造場
霧島酒造(株)
濵田酒造(株)
ヤマサ醤油(株)
ヒガシマル醤油(株)
吉乃川(株) 東京支店
秋田銘醸(株)
菊水酒造(株)
天鷹酒造(株)
月桂冠(株)
キンシ正宗(株)
(株)山本本家
岩村醸造(株)
日本盛(株) 東京支店
大信州酒造(株)
豊島屋酒造(株)
賀茂鶴酒造(株)
(株)家久長本店
(株)矢尾本店酒づくりの森
山梨銘醸(株)

木戸泉酒造(株)
菊正宗酒造(株)
土佐鶴酒造(株)
辰馬本家酒造(株)
和田酒造(資)
奥の松酒造(株)
土田酒造(株)
近藤酒造(株)
雲海酒造(株) 東京支店
石川酒造(株)
谷櫻酒造(有)
(株)土井酒造場
小西酒造(株) 東京支店
宝酒造(株)
(株)小山本家酒造
沢の鶴(株) 東京支店
(株)本田商店
鍋店(株)
太田酒造(株)
(株)栃田酒造店

醉仙酒造(株)
七笑酒造(株)
盛田(株)
都錦酒造(株)
大関(株) 首都圏支社
醉鯨酒造(株)
北雪酒造
佐浦
(株)六歌仙
江井ヶ嶋酒造(株)
新政酒造(株)
(有)金井酒造店
岩瀬酒造(株)
柴崎酒造(株)
(株)醉心山根本店
栃倉酒造(株)
奥の松酒造(株)

第六十回 奉納書初展

令和六年一月六日（土）午後二時より、奉納書初展感謝奉告祭を執り行いました。

書初展奉納作品は一月十五日（月）迄境内に展示しました。

今年の宮司賞は九段中等教育学校三年の中嶋悠理奈さん、氏子崇敬会長賞は山脇学園中学校一年の嶋田実空さんがそれぞれ受賞されました。祭典終了後、社殿にて感謝状と記念品の贈呈が行われました。

第六十回 山王奉書会 表彰者芳名〈順不同〉

宮司賞

九段中等教育学校三年　中嶋悠理奈　殿

氏子崇敬会長賞

山脇学園中学校一年　嶋田　実空　殿

秀作

番町小学校　平石　マミ　殿
お茶の水小学校　橘　凛紗　殿
お茶の水小学校　古川　愛莉　殿
富士見小学校　奥里ちひろ　殿
麹町中学校　鈴木　そら　殿
三輪田学園中学校　池内　早紀　殿
和洋九段女子中学校　舛野　心春　殿
月島第三小学校　林　優月　殿
月島第三小学校　山下　結子　殿
港南小学校　小柳　希颯　殿

宮司賞をいただいて

九段中等教育学校三年　**中嶋　悠理奈**

この度は第六十回日枝神社奉納書初展において、宮司賞という素晴らしい賞に選んでいただき大変感謝しております。私は小学1年から小学5年の頃まで書道を習い、中学生になってから書道部に入部しました。中学1年の頃までは、線の綺麗な止め方すら分からず、お手本通りの位置や線の長さに書くことが精いっぱいで、楽しんで書く余裕がありませんでした。しかし、講師の先生に教わることで、線に気持ちをのせることができるようになったり、余白にも気を配る余裕ができたりすることで、心から楽しめるようになりました。

今回、私がこの言葉を選んだ理由は、この書体が私にとって「新たな挑戦」だったからです。私は今までほとんど行書を書いたことがなく、1度だけ授業で習った時も筆に勢いをつけて書くことが出来ませんでした。そのため行書に対しての苦手意識をなくすべく、この言葉を一年間書き続けました。初めはひらがなと漢字のバランスがとても難しく苦戦しましたが、文化祭で行った書道パフォーマンスなどの経験が活きて力強い線になり、自分の字に少しずつ自信が持てるようになりました。高校生になると勉強も学校行事も忙しくなりますが、そんな時でも自分の可能性を信じ、「新たな挑戦」をし続けたいと思います。

氏子崇敬会長賞をいただいて

山脇学園中学校一年　**嶋田　実空**

この度は第六十回日枝神社奉納書初展において、氏子崇敬会長賞に選んでいただきありがとうございました。小学一年生の頃に美しい字を書くことに憧れて書道を習い始め、中学一年生から書道部の一員となりました。中学校生活をスタートさせた一年目にこの様な素晴らしい賞に選んでいただいたことを、心から嬉しく思います。今回、書初展に出品するにあたり、これからの一年が全ての人にとって穏やかで幸せな毎日、「平和」であって欲しいという願いをこめてこの言葉を選びました。

中学生になって初めて学ぶ行書はとても難しく、書道部の先生方や書道教室の先生方、先輩方からのご指導と励ましのおかげで、心をこめて力強く書き上げることが出来ました。私にとって書道はとても楽しく大切なものなので、これからも多くの方々の支えに感謝する気持ちを忘れずに、見てくださる人の心を穏やかで幸せにできる書を目指し、努力を続けていきたいと思います。

寄稿

山王祭における白象の練物

武蔵大学教授・國學院大學大学院講師　福原敏男

昨令和五年六月の山王祭は、神輿渡御を中心とする神幸祭の年ではなかったが（神田祭と隔年催行）、象の造り物が新作、固定展示された。

本年六月七日（金）の神幸祭には、この象をバルーン山車（風船）として巡行することが予定されている。

この元祖は江戸時代の山王祭に人気を博した白象の練物（ねりもの）（仮装パレード）にあり、その発端は本物の象の渡来にあった。

八代将軍の徳川吉宗は享保年間（一七一六～三六）に、産業開発に役立つ実学を奨励した。そして、科学技術に関する知識を摂取するため、オランダ人や中国人を通じて海外の動植物や文物を積極的に取り寄せた。

幕府は、長崎の清国商人からベトナムの象を莫大な金額で購入し、現地の象使いともども享保十三年（一七二八）に長崎に到着した。

体長三m、高さ二m程の雄象は翌年、長崎を発して千五百km弱の陸路を江戸に向かった。道中の京都では象の天覧が予定され、朝廷は象を「広南（ベトナム）従四位白象」として叙し、中御門天皇が御覧になったという。しかし当時の記録や絵によると、叙位は疑問視されており、象は白色ではなく一般的な灰色であった。

七十四日間を要して五月に江戸に到着した象は、江戸城に召されて吉宗と対面し、浜御殿（現浜離宮）に収容された。

象は道中各地で人気を博して象ブームが起こり、様々な書籍や瓦版、版画、双六などに描かれた。

江戸においては、象をモチーフとする置物、刀剣、刀の鍔、印籠など、当世風にいえばキャラクターグッズが出回った。

象は以後約十二年間にわたり浜御殿で飼育され、諸大名に呼ばれて江戸市中を歩き、町人に見物されたこともあった。

江戸時代の旧暦六月十五日の山王祭には山車を出す四十五組が編成され、享保年間頃には臨時の付祭（つけまつり）として練物が出されていた。

先述の象ブームは山王祭の練物に採り入れられ、実際には灰色の象が、練物では白象として登場した。

山王祭各組の曳行順は決められており、大伝馬町・南伝馬町に続く「麹町十三カ町を中心とする第三組」はさらに六つに分かれていた。その先頭は麹町一・二・三丁目の合同であり、毎回定番の猿の傘鉾に加えて、白象の練物を数回出した。

天保九年（一八三八）版行『東都歳事記』六月**図1**をみると、左端の旗から象の前までは、朝鮮通信使の真似である。白象は布・木・紙による張り子造りであり、『誹風柳多留』によると、麹町にあった呉服屋「伊豆倉」から購入した鼠木綿も使われた。四人が布製の着ぐるみの四本足となり、象使いの掛け声によって歩いたのであろう。

以下、浮世絵と祭礼のプログラム

図1

である番付により、同練物について検討する。

安永四年（一七七五）の北尾重政画『絵本世都の時』には「朝鮮人来朝の練物」**図2**が描かれ、桟敷席や手前の柵内から見物している。

ほぼ同じ時期作の**図3**勝川春潮画「十二候六枚続　三」下部の円形には白象が描かれている。

図2

現存最古の山王祭番付は、**図4**の武蔵野音楽大学図書館蔵の安永九年（一七八〇）版であり、第三組の先頭には町人が演じる以下の附祭が登場した。「清道」旗持が先導し、唐人（朝鮮人）が管弦で囃す朝鮮通信使一行に、虎と長い牙の白象の練物が続く。

朝鮮通信使と虎・象は特に関係のないものだが、異国趣味という点で取り合わされることが折々みられる。

これらが描かれた安永年間の半世紀程前（一七二九年）に、象ブームは起っている。絵や記録に確認できないものの、白象の練物はその直後の山王祭に登場し、吉宗が江戸城内で上覧していた可能性もある。

その後、**図5**の天明八年番付（一七八八、神田神社蔵）には、次頁の裃警固に守られた子象のような白象が描かれる。

また寛政二年番付（一七九〇、日枝神社蔵）には、朝鮮通信使のチャルメラ等の唐人管弦囃子の行列に続く大象、さらに文化七年番付（一八一〇、武蔵野音楽大学図書館蔵）には、唐人行列が先導する白象が描かれる。

一方、**図6**「江戸祭礼図屏風」（年代不詳、東京国立博物館蔵）の絵師は灰色の象を描いており、白象をあえて本物らしく表現したのであろう。**図7**はスイス人のエメエ・アンベールが一八七〇年にパリで出版した〝Le Japon illustré〟挿絵の白象の練物である。彼は一八六三年の日本滞在中、日本人による絵画などを収集して持ち帰り、これらを元に西欧の画家に著作の挿絵を発注した。

享保の渡来象より七十年程経った

図4

図3

十九世紀に入ると、山王祭における白象の練物は、町人の記憶から薄れていったものと思われる。

一方、山王祭に白象の練物が登場しなくなって以降も、浮世絵や**図1**の『東都歳事記』などに描かれ続けた。

長谷川雪旦は『東都歳事記』の白象を誇張して描いており、版行年（一八三八年）の頃にはすでに白象の練物の出番はなかった。

この白象は、雪旦（一七七八年生）の若かりし頃の記憶や、先行作例を元に描かれたのであろう。

ブームとなった象は普通の灰色であったが、見れば病が平癒するとも信じられ、霊獣として絵馬に描かれて寺社に奉納されることもあった。

図5

図6

まして白象は希少で聖なる存在であり、ベトナムでは高齢になると毛が白く見えるようになり、長寿の象徴とされるという。また、生まれつきの白象は、普賢菩薩を乗せた聖象のイメージとして珍重される。

日本では麻疹や疱瘡に白牛の糞が効用ありとされ白い動物は縁起のよいものとされた。享保の象は、天覧時に白く塗られた可能性もある。

盛夏の山王祭において、白象のなかに入って起伏のある長距離を練る四人はつらい役であった（交代要員もいたようだ）。

祭礼時の高温多湿の気候は、南国生まれの象にふさわしくもあり、異国趣味の造形として長く好まれたのであろう。

【参考文献】

石坂昌三　一九九二『象の旅　長崎から江戸へ』新曜社

福原敏男　二〇一八『江戸山王祭礼絵巻　練物・傘鉾・山車・屋台』岩田書院

福原敏男　二〇一九「近世都市祭礼の異国表象―象の造り物と唐人仮装行列―」『東国の祇園祭礼　茨城県霞ケ浦周辺地域を中心に』岩田書院

和田実　二〇一五『享保十四年、象、江戸へ行く』岩田書院

図7は下図右端が先頭、上図は下図左端に続く

図7

節分祭

令和六年二月三日（土）午前十一時半から節分祭が執り行われました。また、祭典に引き続き、「コロナ禍」を経て、四年ぶりに追儺行事が行われました。松本源之助社中による神楽「お福わけ・鬼やらい」の奉奏の後、特別年役として、三宅義信殿・林家希林殿・宮城野翔殿・琴勝峰吉成殿・天照鵬真豪殿・伯桜鵬哲也殿・真矢みき殿・本田紗来殿・天童よしみ殿以下百三十八名が御奉仕されました。

特別年役芳名（順不同・敬称略）

五輪重量挙げ金メダリスト　三宅義信
落語家　林家希林
第六十九代横綱白鵬　宮城野翔
佐渡ヶ嶽部屋　関取　琴勝峰吉成
宮城野部屋　関取　天照鵬真豪
宮城野部屋　関取　伯桜鵬哲也
オスカープロモーション　真矢みき
オスカープロモーション　本田紗来
演歌歌手　天童よしみ

（所属・肩書は奉仕時のもの）

山王祭事暦

箸感謝祭
八月四日（日）十時半

山王祖霊祭
九月二十二日（日）十一時

新嘗祭
十一月二十三日（土）十一時

山王台通信

神社本庁辞令

主典　中村　壮汰
主典　前川　大成
主典　金鑽　和樹

日枝神社権禰宜に任ずる
令和六年四月一日付

新入職員紹介

出仕　和田　朋之
巫女　中野　麻美
実習生　品村　緋美
実習生　福知由莉子
嘱託　上浦　要一
嘱託　立野　宏幸
嘱託　尾林　伸彦

令和六年四月一日付

就任

責任役員　魚谷　雅彦殿
株式会社資生堂
令和六年四月一日付

御神米づくり　御田植祭

令和六年四月二十八日（日）に御田植祭を執り行いました。坂本秀夫奉賛青年会幹事長を始め、総勢二十八名で、御神田地（千葉県香取市）へ出向しました。

天候にも恵まれ、祭典執行の後、田植奉仕を行いました。

尚、稲刈りは八月下旬を予定しております。

訃報

大総代・葵会会長　安倍洋子殿
令和六年二月四日

安倍洋子殿は、平成十五年四月から当神社葵会会長、平成十七年四月から当神社大総代を務められ、神社の維持運営にご尽力頂きましたが、令和六年二月四日に御逝去されました。（行年九十五）

茲に御功績を称え、謹みてご冥福をお祈り申上げます。

〈通巻 百四十四号〉
発行　令和六年六月一日
編集　日枝神社社務所
東京都千代田区永田町二丁目十番五号
（郵便番号　一〇〇―〇〇一四）
TEL　〇三―三五八一―二四七一（代表）
FAX　〇三―三五八一―二〇七七
http://www.hiejinja.net/

山王祭の最新情報をチェック！

日枝神社 山王祭公式アプリ

無 料

iOS端末 android 端末 対応

ホームページ・Twitter・Facebookでも情報を公開しています。QR コードもしくは URL からご覧ください。

山王祭
公式ホームページ
http://www.tenkamatsuri.jp/

日枝神社
公式 Instagram
https://www.instagram.com/hiejinja

日枝神社
公式 Facebook ページ
www.facebook.com/hiejinja/

令 和 6 年

日枝神社 七五三（なごみ）プラン 受付

6月20日より

日枝あかさかでは御祈祷・お祝い着レンタル・着付け&ヘアーセット・スタジオでの写真撮影がセットになったお得なプランをご用意しております。

詳細は OR コードよりご確認ください▶

受付・お問合わせは 日枝（あかさか） 03-3502-2205